

「不安」から照らす「生」の諸相



谷川 俊太郎

— ことば・ころ・肉体… —

戦争、病い、不況、災害など、社会事象や自然現象による「不安」は、人にさまざまな表現をもたらしてきました。

「不安」は、われわれの「生」の感覚を揺るがします。それゆえ、「不安」に基づく表現を追究することは、同時に「生」の諸相をあぶり出すことにもなるのだろうと考えます。自身を取り巻く不安な事象を、人はどのように内面化し、相対化し、また、乗りこえてゆこうとするのでしょうか。その際の表現行為は、人にどのような意味や力をもたらすのでしょうか。

このような視点から考察を重ねてきた私たちは、われわれの生きる世界を、広く、柔らかく、そして鋭く、「ことば」で射止める**谷川俊太郎さん**をお迎えし、来たる**6月4日(土)**、「不安」と「生」について一緒に考えてみることにしました。

この展示は、それに先立ち、それぞれが専門とするさまざまな領域から「不安」とらえ、「生」をめぐる思考の糸口を照らそうとするものです。そして、そのどれもが谷川氏の著作と関わりあいを持っています。

ご覧いただくみなさんが、自身の「生」について思考をめぐらすきっかけとなりましたら嬉しく思います。

なお、「**谷川俊太郎さんに聞いてみたいこと**」や「**この展示に関する感想**」を、ご意見票にお書きくださり、展示スペース内の専用箱にお寄せください。ここで掲示をさせていただきますのと同時に、**6月4日(土)**、**谷川さんご本人にお答えいただきます**。また、当日ご紹介できなかったご意見につきましても、谷川さんにお届けいたします。ぜひ、ご参加ください。

2016 年 4 月

不安と生の研究会

谷川俊太郎さんからの贈りもの

本企画へのメッセージをお願いしましたところ、
この詩が届きました。「とんでもないこと」です。

●谷川俊太郎氏プロフィール

1931 年東京生まれ。詩人。父は愛知県常滑市出身の哲学者、谷川徹三。詩作のほかに、絵本、脚本、翻訳などでも活躍。「鉄腕アトム」の主題歌作詞でも知られる。同人誌「櫂」（茨木のり子・大岡信・川崎洋・吉野弘・岸田衿子・友竹辰ら）のメンバーとして、戦後詩における「感受性の時代」を拓いた詩人のひとり。詩壇に清新な驚きをもって迎えられた第一詩集『二十億光年の孤独』をはじめ、『定義』、『私』、最新詩集『あたしとあなた』にいたるまで、著書多数。

不安と生の研究会

谷川 浩太郎

とんでもないこと

なにかとんでもないことがおこりそう

なにおこるのか

じしんじゃない

せんそうじゃない

だれかがしぬのでもない

ちきゅうがほろびるのでもない

でもこわい

なにかとんでもないことがおこる

きつとおこる

きようじゃない

あしたでもない

でもいつかおこる

おこるといったいどうなるのか

しんぱいするのはいやだ

とんでもないこと

おこるのならおこればいい

おこってみろ

いつだっていい

おこってみろ

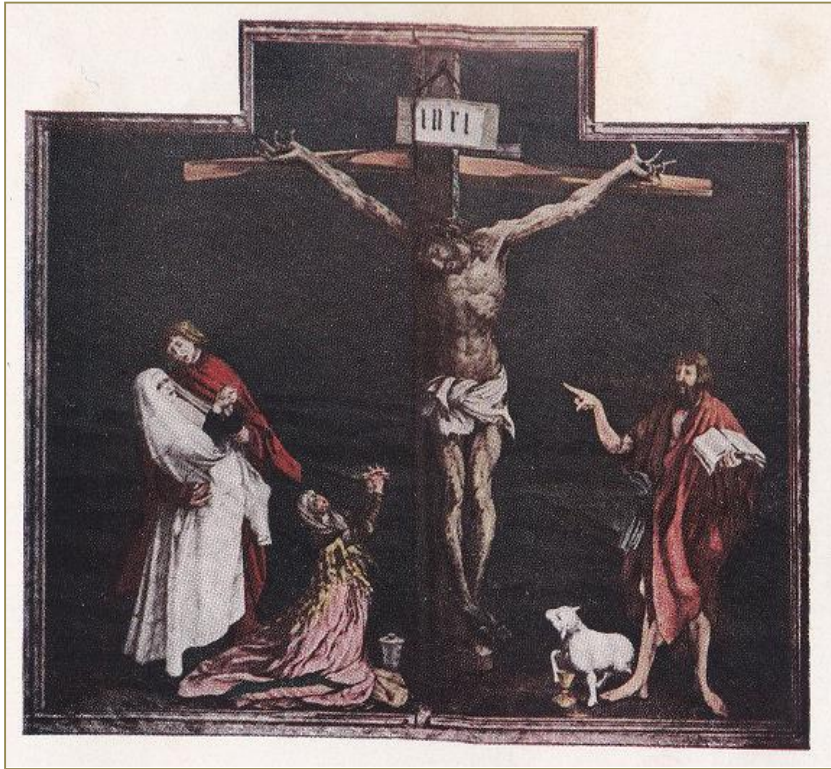
おこればもうこわくない！

人間は、なぜ、血の詰まったただの袋ではないのか。

—フランツ・カフカ「兄弟殺し」—

宮崎 真素美(日本文化学部国語国文学科)

「不安」は人の眼差しを自身の内外に散乱させる。「肉体」はその表象を時に痛ましく浮かべる。



【グルネヴルド「イーゼンハイム祭壇画】】(『荒地詩集 1953』扉絵)

「キリストの両掌の指は、何ものかを掴もうとするかのように、五指をひらいて曲り、釘の痛みを耐えている。胸は細くくびれ、肋骨のあらわな胸はふくれあがつている。之はぶら下つた肉体の完全な表現だ。右の胸の傷口から血潮はほとぼしり、重ねた足に打ち込んだ釘からも血は流れて十字架の木を汚している。茨の冠と乱れた髪、髯ののびた顔はやせこけ、眉をよせ合せて眼をとち、口はややひらいて、耐えつづけた苦痛にゆがんでいる。頭は今にももぎり取れそうにがつくりと傾いて重い。蒼黄色い屍は一面の斑点に蔽われ、腰にまとうた布切れは、ボロボロにさけている。」

「だが、グルネヴルドの磔刑図には、孤独な苦悩と熱烈な信仰告白が燃えている。彼の精神は痛ましい程赤裸裸だ。キリストの傷口は彼の傷口だ。苦痛にゆがんだキリストの顔は直ちに彼の心を示す。聖ヨハネの嘆きは彼の悲しみであり、二人のマリアの祈りは彼の祈りである。」

「彼は己が魂を描いたのだ。」

(三好豊一郎「基督磔刑図」『荒地詩集 1953』)

わが自愛の要求に応えるに
剃刀を軽く咽喉にふれて引く

反転する薄い皮膚を指先につまんで
顔の上までめぐりあげる

鏡をのぞく するとつめたく暗い夜の中へ
露出した鼻孔は荒い呼吸を吐きつけ

苦悶する脈管が枯れた林のように映る
血まみれの夢想―蒼ざめた不滅の「徳」の上に。

(三好豊一郎「室房にて」抜「純粋詩」昭23)

裏返せ

裏返してくれ 俺を

俺の皮膚を匿してくれ

俺の額は凍傷にかかっている

俺の眼は羞恥で真赤

俺の唇は接吻に飽きた

裏返せ

裏返してくれ俺を

俺の中身に太陽を拝ませてやってくれ

俺の胃や脾臓を草の上にひろげて

赤い暗闇を蒸発させろ

俺の脾臓に青空を詰める

俺の輪精管はもつれたままで

黒い種馬たちに踏みにじらせる

俺の心臓と脳髓は白木の箸で

俺の恋人に食わせてやってくれ

裏返せ

裏返してくれ 俺を

俺の中の言葉たちを

喋らせちゃってくれ 早く

俺の中の弦楽四重奏を

ならしちやってくれ

俺の中の年とつた鳥たちを

飛ばしてやってくれ

俺の中の愛を

すつちやってくれ 悪い賭場で

(谷川俊太郎「頼み」抜「あなたに」昭35)

入れ替へねばならぬと知つたのもあとの祭といふものだった
(三好豊一郎「避雷針、或は瀕死の夢」抜『荒地詩集 1951』昭26)

【グルネヴルド「イーゼンハイム祭壇画】】(『荒地詩集 1953』扉絵)

不安と安らぎの揺籃 『あたしとあなた』

宮崎 真素美（日本文化学部国語国文学科）

木洩れ陽の下に
いたかった
ずっと
お婆さんになったねと
柔らかい声で
未来のあなたが
あたしに言う
置いてけぼりに
して下さいと
歴史に向かって
あたしは言う
戦場の
ぬかるみに
座りこんで
仔犬を
抱きしめている
そんな
過去完了の
あなた
風に碎かれて
光が
踊っていた
記憶

（「木洩れ陽」）

〈あたしの／あ／から／あなた／の／あ／へ〉（「あたしとあなた」）
という響き合いから、この詩集の世界ははじまります。

〈あたし〉から〈あなた〉への語りかけでつらぬかれた世界は、
〈あなたと／あたし／そこら中に／いるわ〉（「カフェ」）
とされたり、

〈世界中の／無数の／あたしと／世界中の／無数の／あなたは／どこにも／いない〉
〈今／一人の／あたしは／ひとりで／一人の／あなたを／待っている〉
（「特製しおり」中の無題詩）
とされたりもします。

変幻自在の〈あなた〉と〈あたし〉。それが、私たちの世界のありようなのかも知れませ
ん。そして、そこには〈いる〉ことと〈いない〉ことの狭間が見え、死の影も揺曳します。

〈お婆さんになったねと／柔らかい声で〉〈あたし〉に語りかける〈未来のあなた〉と
〈過去完了の／あなた〉は、時の狭間をかいま見せ、私たちの存在が、それら淋しみのた
ゆたいに浮かべられていることを気づかせます。だから、〈置いてけぼりに／して下さいと
／歴史に向かって／あたしは言う〉のでしょうか。

イギリスの詩人T・S・エリオットも同じことを感受していたひとりです。

〈現在の時も、過去の時も／未来には一つの時になるだらう／そして、未来は過去の中に含
まれる／もしすべての時が現在であるなら／すべての時は贖ふことが出来ない〉
（「バートン・ノートン」抜 鮎川信夫訳）

時は、何もかもを連れ去ってゆくかに見えて、それらを包み、ひっそりと、その気配を差
し出してくれてもいるようです。私たちは、その不安と安らぎの揺籃のなかで揺られている
のかも知れません。

男は化粧の下の女の素顔、そこに現れた歳月がもたらすものと歳月
が奪うものが一つになった自然の力を、ひそかに畏れます。

—谷川俊太郎「自然の力」『今日までそして明日から』—

『やさしさは愛じゃない』『今日までそして明日から』

宮崎 真素美（日本文化学部国語国文学科）

私のからだを見て下さい、
でもこれが私じゃありません、
私の心を探して下さい、
でもそれが私じゃありません。

苦しみだけが私です、

苦しみだけがほんとです、
遠くに遠くに神様はいる、お顔は
かすんで見えません。
遠くに遠くに神様がいる、ひっそ
りひとりで立っている。

（やさしさは愛じゃない）〔抜〕

これが私です

たくさん私たちのの中のひとり

（中略）

これまでがつい昨日のように思え
る日

これからが地平に消える一本道の
ように思える日

使い慣れた器に慰められながら
思い出にひそむひとに心を残しな
がら

一日一日を生きてきた
そして今日が
ある

（『今日までそして明日から』〔抜〕）

〈でもこれが私じゃありません〉〈でもそれが私じゃありません〉と繰り返す二十代の〈私〉は、〈苦しみだけが私〉〈苦しみだけがほんと〉、と挑みかかり、ときに逸らし、白黒の世界から無表情な視線を投げています。一方、五十歳の〈私〉は、やわらかで美しい色に彩られ、〈これまでがつい昨日のよう〉〈これからが地平に消える一本道のよう〉、〈使い慣れた器に慰められ〉〈思い出にひそむひとに心を残し〉、と遠近（おちこち）にひっそりところ揺らしながら、それぞれの豊かな視線で、〈これが私です〉、とこちらを見つめています。

ふたつの写真詩集は、かつての〈私〉と現在の〈私〉とがまるで向き合った格好で、それは娘と母のようでもあります。さまざまな痛みのさなかにいる若い〈私〉は、四半世紀後に〈これが私です〉と言える〈私〉に憧れもするでしょう。四半世紀後の〈私〉は、かつての痛みをいとおしく思いながら、もう別のものに变化したのかも知れないその痛みを懐かしみ、また、憧れることもあるでしょう。

「不安」は未来とともにあり、それは「期待」と双子です。未来を思うとき、そのとらえどころのない緊張が、ひとを不機嫌にもします。若い〈私〉が全身で表現しているのは、そんな思いなのかも知れません。一方、「今日まで」を持つ〈私〉は、いつしか〈一日一日を生きてきた〉感触を手にしており、それゆえ、〈これまで〉と〈これから〉のあいだにある、確たる〈一日〉である〈今日〉が大切にされています。〈今日〉の〈私〉が〈これまで〉へとすり抜けてゆくのを留められない、きっと、そのことを「知る」ひととなったからです。

われわれの〈不安と肉体〉——不安な時代における人間の〈生〉の表現

若松伸哉（国語国文学科）

◆昭和の幕開けと不安…芥川龍之介という肉体の死

〈不安と肉体〉——このテーマを設定したとき、昭和の端緒に起こった**芥川龍之介の自殺**（昭和 2 年 7 月 24 日）は大きな意味を帯びるだろう。「何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安」という、指示対象を曖昧にしたまま、未来の投企への絶望性を語るこの言葉を遺して自らの肉体を破棄した芥川は、彼の死後に発表された**「歯車」**（昭和 2 年 10 月）においても、語り手「僕」は自身のドッペルゲンガー（分身：これを見た者には死が訪れるという俗説がある）の出現など、暗示的なかたちで迫ってくる様々な死の兆候に「不安」の言葉を繰り返している。

◆〈不安の時代〉と文学表現…太宰治・石川淳の挑戦

芥川龍之介が発した〈不安〉という言葉は、その死から数年後、社会的な〈不安〉として世間に再登場する。昭和 8 年 2 月 20 日に発生した特高警察によるプロレタリア文学作家・**小林多喜二の殺害**は、そのとき多くの知識人の心を捉えていた左翼思想から彼らを転向させる一つの契機となる。肉体的な苦痛への恐怖から思想を捨てた知識人たちは虚無的かつ不安定な心情を吐露し、〈不安〉という言葉が社会的なブームとなる。そのような時代状況のなかで作家として登場した**太宰治**は、**「道化の華」**（昭和 10 年 5 月）や**「ダス・ゲマイネ」**（昭和 10 年 10 月）において、人間の内面ではなく外面の重視や、多重化する自我意識を主題として、それらをユーモラスに描き出すことによって、文学における新たな人間像の描出を試みている。同時期に文壇に登場した**石川淳**もデビュー作**「佳人」**（昭和 10 年 5 月）において、様々な人間になぞらえられる主人公を設定し、多重化する人間像を描いたほか、第 4 回芥川賞を受賞する**「普賢」**（昭和 11 年 6～9 月）では不安の時代における思想（知性）と生活（肉体）の相克を虚構化したすぐれた作品を提出している。しかし、こうした不安の時代における新たな人間像描出の追求は、日中戦争の勃発後、死と隣り合わせの戦地における兵士の肉体体験をリアルに語る戦争小説の隆盛の前に潰えてしまう。

◆戦後の〈不安と肉体〉…三島由紀夫・土方巽・寺山修司

終戦直後、**坂口安吾「白痴」**（昭和 21 年 6 月）や**田村泰次郎「肉体の門」**（昭和 22 年 3 月）など、本能に根差した人間の裸形の肉体を扱った〈肉体文学〉が現れたのはよく知られているが、ここで注目したいのはその後の高度成長期における肉体の表象である。明晰かつ構築的な文体で文壇における戦後の一大スターとなった**三島由紀夫**が、肉体改造のために鍛錬をはじめたのがまさに高度成長期がはじまる昭和 30 年であった。鍛え上げられた三島の肉体は昭和 45 年 11 月 25 日に彼自身によって終焉をもたらされるが、三島の肉体はまさに上昇する日本の高度成長と軌を一にしていた。しかし一方で、三島の近傍にもいた暗黒舞踏家・**土方巽**は病や死といった衰弱を孕む人間の肉体を表現し、劇作家・**寺山修司**も土俗と絡んだ異形の肉体を描いている。高度成長期の裏では〈不安〉な肉体を描き出すこのような前衛的な試みもたしかに存在していた。

◆現代における〈不安な肉体〉の表現

芥川龍之介が〈不安〉を呟いてからおよそ 80 年を経た現在、やはり我々は今もその〈肉体〉を〈不安〉に苛まれている。**真壁茂夫**（2017 年度本学にて講演予定）によるパフォーマンス集団「OM-2」は、現代の〈不安な肉体〉を問題化し、人間関係や権力・資本が強い〈不安〉に抗する個の〈肉体〉の立ち上げへの挑戦を舞台において続ける。

〈不安〉とは人間にとって不安定でネガティブな状態であるが、一方、新たな人間の姿を探っていくその契機もまたここに胚胎している。

不安と生の研究会

言葉による「私」と、肉体としての「私」

〔…〕 // 私は母によって生まれた私 / 「私」は言語によって生まれた私 / どっちがほんとうの私なのか / もうその話題には飽き飽きしてるのに / 「私」が突然泣きだすから / ほうじ茶にむせてしまった // 〔…〕

谷川俊太郎「「私」に会いに」（詩集『私』2007年）

肉体と孤独

からだの中に / 深いさけびがあり / 口はそれ故につぐまれる // 〔…〕 // からだの中に / いかなる比喩も語れぬものがあり / 言葉はそれ故に記される // からだの中に / ああからだの中に / 私をあなたにむすぶ血と肉があり // 人はそれ故にこんなにも / ひとりひとりだ

谷川俊太郎「からだの中に」（『空に小鳥がいなくなった日』1974年・サンリオ）

男が男のからだのかたちしてしか / 生きることのできないのはくやしい / かたちのないところだけであったなら / もっと自在にあなたと交われるものを // だがことばよりくちづけで伝えたいと / そう思うときのころのときめきは / からだなしでは得ることができない / いつか滅ぶこのからだなしでは // こころがどこをさまよっていようと / こころがいくつに裂けていようと / 女がただひとつのからだのかたちして / いま私のかたわらにいろのはかなしい

谷川俊太郎「からだ」（『日々の地図』1982年・集英社）

谷川俊太郎の詩における、言葉による「私」と肉体としての「私」。しかし谷川詩のなかで、その言葉と肉体は単純な二項対立的関係ではない。肉体は不自由さや限界を抱えながらも「私」にとって必要不可欠なものでもある。その肉体に根ざした〈言葉〉は、孤独な肉体から出発して他者へと志向する自由な「私」を現出させる。

そして谷川俊太郎の初期の代表的な詩「二十億光年の孤独」のなかにも、「孤独」ゆえに「もとめ合う」人間の「不安」が描かれており、その詩は「くしゃみ」という肉体（身体的）的反応で締めくくられている。

〔…〕 // 万有引力とは / ひき合う孤独の力である // 宇宙はひずんでいる / それ故みんなはもとめ合う // 宇宙はどんどん膨らんでゆく / それ故みんなは不安である // 二十億光年の孤独に / 僕は思わずくしゃみをした

谷川俊太郎「二十億光年の孤独」（『二十億光年の孤独』1952年・創元社）

不安とともに生き不便益を得る —“道具を使うのは結局人間だからね”—

愛知県立大学・情報科学部・奥田隆史

不安と生の研究会

鉄腕アトム

(作詞: 谷川俊太郎, 作曲: 高井 達雄)

正義のスーパー
ロボット、科学
万能、明るい未
来社会…



- 空を超えて
- ラララ 星の彼方
- ゆくぞ アトム
- ジェットの限り
- 心やさし ラララ
- 科学の子
- 十万馬力だ 鉄腕アトム
- 十万馬力だ 鉄腕アトム

①

我が友コンピューターに

(『空に小鳥がいなくなった日』, 谷川俊太郎)

大型計算機、マ
イコン、パソコ
ン、ワープロ、
産業の米、ムー
アの法則、まだ
明るい未来…



- …
- 僕はきみを愛してはいないが怖れてもない
- きみはますます巨大なるだろう
- きみはますます利口になるだろう
- でも僕は僕のままだろう
- …

②

103歳になったアトム

(『夜のミッキー・マウス』, 谷川俊太郎)

インターネット、
携帯、スマホ、
タブレット、AI、
機械との競争…、
雲行きが怪しい



- …
- 103歳になったが顔は生まれた時のままだ
- …
- ぼくに魂ってものがあるんだらうか？
- 人並み以上の知性があるとしても**寅さん**に負けないくらいの情があるとしても
- …

③

人間はつらいよ

(そんな風には見えないように生きる)

不安なんてのはな、歩いてるうちに風が吹き飛ばしてくれうあ。



- …
- アトムという存在そのものが、哀しみと言うしかない何かを負っていることを、現代文明を生きる私たちが心のどこかで感じている
- …
- 『うたのチカラ JASRACリアルカウントと日本の音楽の未来』, (詩人・谷川俊太郎)

④

① 鉄腕アトムを初めて観たのは白黒テレビでした。その当時の僕が、一番の【不安】だった場所、怖かったところは、母の実家の屋外トイレでした(まだ水洗トイレではありません)。その屋外トイレは暗く、悪臭に充ちていました。色々な生き物もいました。トイレで本を読むなんてことは想像できませんでした。早く用を済ませて出てくるところでした。その頃は、“早飯早〇も差のうち”と言われていました。学校で学ばなくても、褒められたのです。やがて、そのトイレは屋内、水洗、和式、温水洗浄、そして自動開閉機能搭載瞬間式温水洗浄へと進化しています。道具のおかげで、怖いという【不安】からは解消されました。さらに段階を経ているので、トイレに関してはグローバル(グローバル)対応になりました。どこでも【生きる】ことができます。不便や無駄に益、【不便益 (benefit of inconvenience)】という益があるのです。

② パソコンを使うようになったのは学部4年生でした。当時、僕の、人前で話せるレベルの唯一の【不安】は悪筆でした(安心して下さい。誰でも人に話せない【不安】はたくさんあります)。でもパソコンにはワープロが入っていました。多くの人に悪筆がばれずに卒論が書けました。ラッキー！当時のパソコンはインターネットにもつながっていませんし、バイリンガルでもなく、素直というより頑固でした。時に暴走もしました。おかげで僕は少しは我慢強くなりました(【不便益】)。これは【生きる】ために大切なことです。ところで、ワープロのことを清書の道具だと思っている人はいませんか？実はワープロは「思考の道具」なのです。ワープロのナビゲーション・ウィンドウを上手に使うと長い文章が書きやすくなります。このことをはっきりと認識するのに約30年かかりました(【不便益】)。ドラえもんは“道具を使うのは結局人間だからね”とのび太君に忠告していました。どうも正解のようです。

③ ホモ・ルーデンス(ラテン語で遊ぶ人/遊戯人)とは？オランダの歴史学者ホイジンガの人間観で、遊び/遊戯が人間活動の本質であり、文化を生み出す根源であるという主張です。さしずめ現代人はホモ・スマホ(ラテン語は不明)かもしれません。海外メディアは「スマホゾンビ、日本の路上に氾濫」と表現しています。ゾンビは生ける屍のことで、肉体的に生きてはいるだけで、精神的には死んでも同然の人という意味があります。“精神的に向上心のない者はばかだ”(夏目漱石、『こころ』)という台詞が浮かびます。電車に乗っても、食事中も、仲間いても一心不乱にスマホです。果たしてこれでもいいのかなと、【不安】になります。情報通信を研究してきて、(少しは社会)貢献してきた人間の一人として、こんな風景にしたかったのかなと考えるときがあります。おもてなしの国のつくりがゾンビの国へ…、スマホをいじっているうちに、国内外で色々なことが起きています。“道具を使うのは結局人間だからね”。重い言葉です。

□ 人工知能(AI)が進化し、人間の仕事が奪われるという噂があります。その結果、ホモ・ルーデンスが増えるといわれています。増えるのでしょうか。【不安】です。

□ 某国の兵士は毎朝、自宅から自動車で指令本部に行きます。仕事は遠く離れた戦闘地域のロボットをスマホで操作しています。操作を間違ったらどうなるのでしょうかとイメージしながら【不安】で任務をこなしていることでしょう。でも、この兵士が一番危険なのは通勤の時の交通事故です。兵士の家族の【不安】は通勤です。

④ 映画「男はつらいよ」の主人公は寅さんこと車寅次郎です。2015年末のある日、昼間はDVDで寅さん、夜は映画館でスターウォーズ新作を観るという日がありました。「男はつらいよ」、若い頃は自分が観る映画ではないと思っていましたが、なぜか大人買いして48作揃えてしまいました。昨年来、新聞にも寅さんについての記事をみかけます。だれもが【不安】で寅さんを求めているのかも知れません。寅さんはいいい加減な人と捉える人が多いでしょう。しかし【生きる】という点ではいい加減(いい塩梅)だったような気がします。ところで、偉い人の筋書きだと21世紀は情報化社会を経て情報社会になるはずだったのですが、どうも情報過社会になっているような気がします。いい加減(いい塩梅)でなくて、いい加減な情報や、【不安】をおおるような怪しげな情報もあふれています。受け手に取捨選択、思考が求められています。“情報を使うのは結局人間だからね”です。さて、情報とは「情(なさけ)けに、報(むく)いる」と読むこともできます。僕はこの読み方も大事にして【生きる】ようにしたいと思います。

□ “「さしずめインテリだな」寅さんは教養をどう見ていたか”(朝日新聞、2015年8月19日)。

□ “はじめての寅さん 人情深く明快、生き方の理想像”(朝日新聞、2016年1月17日)

★ポスター使用上の注意★: 皆さん、ここに書いてあることは私が、今、感じていることで、正解ではありません。寅さんが“お前と俺とは別な人間なんだぞ？早い話がだ、俺がイモ食って、お前の尻から「ぶっ」と尻が出るか？”(『男はつらいよ 第1作』)と言っているように、人は人、自分は自分です。色々考えるきっかけにしてください。

心理学からみた「不安」

田上 恭子 (看護学部)

「不安ですべてが始まる」 (坂野, 2015)

『不安の力』 (坂野, 2015)

不安の心理学的定義

『心理学辞典』 (中島他, 1999)



- “安心だけの生活だったら?”
⇒それだけで何もしなくなってしまうかもしれない
- 不安は生きていくための力となる 例) 身だしなみも不安から

- 自己存在を脅かす可能性のある破局や危険を漠然と**予想**することに伴う不快な気分のこと

進化論的には...

- 外敵という脅威をあらかじめ検知し、立ち向かうための準備をするという、**生存にとって重要な役割**

現代社会では...

- 外敵⇒自分の身体的精神的存在を間接的に脅かす存在
- **より適応的に生きていくための道具**としてはたらくようになってきた

- 信号や手がかりを通じて**未来の危険を現在**に手繰り寄せることによって発生する

健康な不安と病的な不安

「不安からは解放されることはない。ただむきあうしかないのだろう。むきあうためには、それが健全な不安か病的なものか、様々な角度から正確に把握する必要がある...」 — 『こころの科学・不安とむきあう』 (中山, 2006)

現実不安

- 外的危険に対する不安
- 予期され予見された障害を認知した時の対応であり、逃避反応と結びついている
- 自己保存の欲動の現れである

神経症的不安

- 危険がなんの役割も果たさない、あるいは非常にわずかな役割しか演じていない不安
- 内的危険、内的衝動に対する自我の対処不能状態によって生じる

解体不安
迫害不安

『精神分析入門』
(フロイト, 1917)

健康範囲内の不安

- 理由 (対象) がある
- 表現できる
- わかってもらえる
- がまんできる
- 長く続かない
- いったん去れば気にならない

ノイローゼ性の不安

- 理由 (対象) がない
- 表現しにくい
- わかってもらえない
- がまんしにくい
- 長く続く
- またこないかという不安が続く

『不安の病理』
(笠原, 1981)

不安の適応的機能

- 「不安は、我々の死と究極的な非存在 (nonbeing) への関心を表している」
— 『ストレスと情動の心理学』 (ラザルス, 1999)
⇒ 生の欲求, 生きる力
- 時間的展望の問題とかかわる... “未来志向的”
- 環境への積極的働きかけ (状況を変えようとする) をもたらす
- さまざまな行動が動機づけられる
- 適度の不安は認知能力やパフォーマンスを高める
— 『不安の力』 (坂野, 2015)
『不安の心理学』 (生月, 1996)
- **不確かさに立ち向かう心のはたらき** (坂野, 2015)
⇒ 認知的完結欲求の高さ
曖昧さへの不耐性 (intolerance of ambiguity)
...権威主義者に特徴的
(友野・橋本, 2002; 辻本, 2000)

不安とむきあうために〜心理臨床家の役割〜

- containing「容れる」(ビオン), holding「抱える」(ウィニコット)
- 鏡として機能する (ラカン) — 『最後の授業』 (北山, 2010)
- “物語り”を通して、不安と向き合い、不安を受け容れていく
— 『生きるとは、自分の物語をつくること』 (小川・河合, 2011)
- “今”という瞬間を、意識的に生きる
— 『マインドフルネスストレス低減法』 (カバットジン, 1990)

詩と心理臨床〜その重なりと相違〜

谷川 俊太郎 (2012)

「...意識下というんでしょうか、潜在意識というんですか、我々はそういうところから言葉が出てくる仕事をしているわけですね。心理臨床の仕事をしていく方々も、やっぱりそういうところを探って、どうにか人が変わってゆけることに寄り添おうとしていらっしゃるわけでしょう? そこで僕は、意識じゃなくて『意識下』ということ意識するようになった。詩の言葉が、意識から出てくるわけではなくて、どっちかという、意識下から、もやもやしたものが、やっと言葉になってポコッと出てくるというイメージに変わっていったんです。...」

「...河合さん (注: 河合隼雄氏) は、どちらかというと『物語』というものを中心にして人間を理解するし、心理療法的に『物語』を探っていくという形でやっていらっしゃるでしょう?僕は、まったくその対極なんです。『詩』というのは、『物語』とはぜんぜん違うという立場なんですね。...」
— 『心理臨床ブロムナード』 (山中, 2015)

.....僕が河合さんにいろいろ質問して、お仕事を聞くという事だったんですが、話を聞いているうちに、河合さんがしていच्छやることと自分が詩を書いていることが、すごくよく似ているという感じがしたんです。意識下というんでしょうか、潜在意識というんですか、我々はそういうところから言葉が出てくる仕事をしているわけですね。心理臨床の仕事をされている方々も、やっぱりそういうところを探って、どうにか人が変わってゆけることに寄り添おうとしていच्छやるわけでしょう？そこで僕は、意識じゃなくて「意識下」ということを意識するようになった。詩の言葉が、意識から出てくるわけではなくて、どっちかという、意識下から、もやもやしたものが、やっと言葉になってポコッと出てくるというイメージに変わっていったんです。その中には、音的なものもあるし、イメージ的なものもあります。相当、未分化なものなんだけれども「意味」も含めて出てくる。だけど、そこで出てくる言葉の意味というのは、普段、我々がこうやってしゃべっている、日常的な言葉の意味ではない、なにか違う意味みたいなかたちで出てこない、詩にはならないんですね。.....それまでは、意識とか意識下みたいなことでは考えていなくて、自覚せずに同じことをやっていたと思うんだけど。つまり、「詩の自覚」ですね。

（山中氏:谷川さんの側から言うと、心理臨床家がやっていることと詩人がやっておられることが、重なるかなと思われたんですね。）

ところが、河合さんは、どちらかというと、「物語」というものを中心に人間を理解するし、心理療法的に「物語」を探っていくというかたちでやっていच्छやるでしょう？僕は、まったくその対極なんです。「詩」というのは、「物語」とはぜんぜん違うという立場なんです。

「物語」というのは、ある程度、歴史的にずっと遡って、源を辿っていくということが可能ですし、未来に向かって、やっぱりプロットが感じられるというところがあるんだけど、「詩」の場合には、僕は「ぜんぶ輪切りだ」と言っているんです。輪切りにして断面を見せるというイメージなんです。

.....僕も「15字詰め何行かで書いてくれ」みたいに言われるのが好きなんです。.....何か器に入りたいというのは共通なんです。

だいたい言葉の出かたというのは散文だろうが、なんだろうが、みんな共通なものだと思うんですが、その出かたにも二手ある。出っ放しで、垂れ流したい人と、何か器に入れないと気が済まない人と、二手に分かれるような気がするんです。僕は、どっちかという、器に入っていないと不安なんです。

（山中氏: ところで、私が拝見するところ、谷川さんは、日本の詩形で決まっている七・五調であるとか、あるいは、イメージを介するのとは違う方向で、形に捕らわれない方向から始められる。だけど、器には入れる。）

そうですね。七・五調のもっている日本的な情感というのに、僕はちょっと不感症的なところがあって、俳句止まりなんです。.....七・五調で書かれたものというのは、やっぱりどうしても我々から見ると、アナクロニズムなんです。

だから、七・五調をうまく取り入れながら、それを崩して、日本語の調べというものをなにか探してきたというのが、私の詩の書き方だと思います。

山中康裕氏（精神科医、臨床心理士）との対談「詩と心理臨床」（2012年）
—山中康裕『心理臨床プロムナード』遠見書房（2015年）pp.160-162より抜粋

心理臨床の仕事のひとつは、無意識を意識化することで変化を生み出すことといえるかもしれない。それは、広い意味での“ことば”によって内的世界に枠をつけ意識化していくことではないかと考えられる。谷川の語りから、谷川の詩作とは意識下にあることばにならないものをことばにすることであり、ことばによって世界を切り取る営みであるように感じられる。ここに谷川俊太郎の詩作と心理臨床の仕事との接点がありそうである。

枠がない世界は自由である。しかし自由には不安がともなう。不安と向きあい、生きる力とするためには、“ことばにする”ということに意味があるのではないかと考えられる。

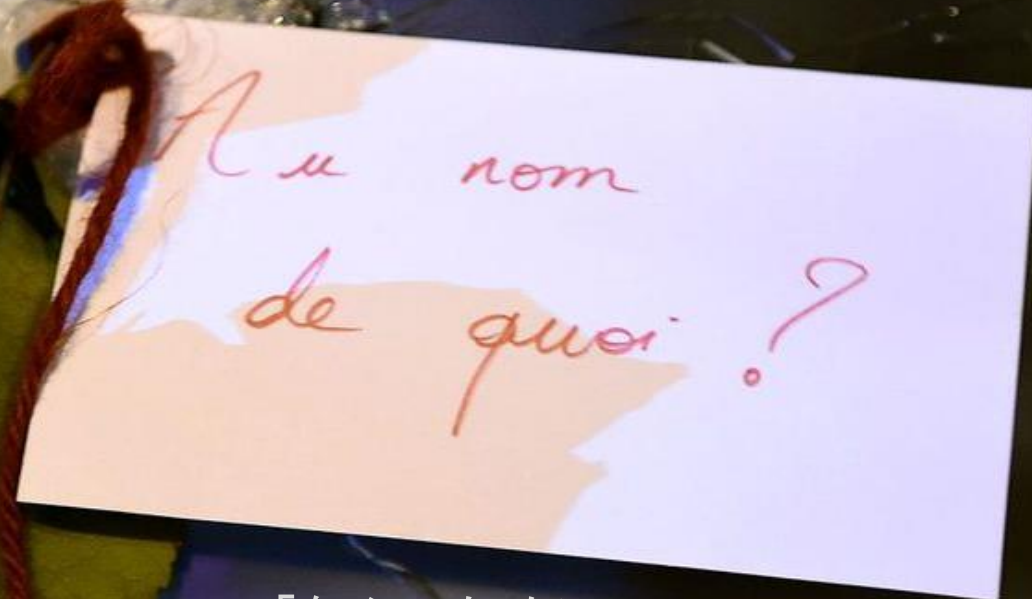
イスラム原理主義とヨーロッパの「不安」

2010年末に始まる民主化運動「アラブの春」は、シリアを始めとする一部の国々に、イスラム原理主義の高まりによる内戦や混乱をもたらした。その結果、2015年には100万人を超える難民が、地中海を越えてヨーロッパに押し寄せる。

一方ヨーロッパでは、難民の受け入れをめぐる混迷を極めているだけでなく、同化・統合の困難さに直面した移民第2・第3世代の一部が原理主義に感化され、反社会的行動に走るようになった。そして、2015年のフランスは、1月の『シャルリー・エブド』襲撃事件に始まり、11月のパリ多発テロ事件に至るという、危機的状況に陥った。

フランス革命に遡るヨーロッパの民主主義は、果たしてどこまで有効なのか。ヨーロッパの伝統・文化を存亡の危機に晒してまで、同化・統合が出来ない「他者」、更にはそれを拒む「他者」を、どこまで受け入れるべきなのか。「不安」のヨーロッパの自問が続いている。

外国語学部
ヨーロッパ学科
フランス語圏専攻
原 潮巳



「なんのために？」

「鳥羽 1」 (谷川俊太郎『旅』1968)

この白昼の静寂のほかに
君に告げたいことはない
たとえ君がその国で血を流していようと
ああこの不変の眩しさ！

「これが私の優しさです」 (『谷川俊太郎詩集』1968)
窓の外の若葉について考えていいですか
そのむこうの青空について考えても？
永遠と虚無について考えていいですか
あなたが死にかけているときに

谷川俊太郎と絵本 世界認識をつむぐ《ことば》

藤原 智也
(教育福祉学部 教育発達学科)

□谷川俊太郎が惹かれたレオ・レオニの絵本

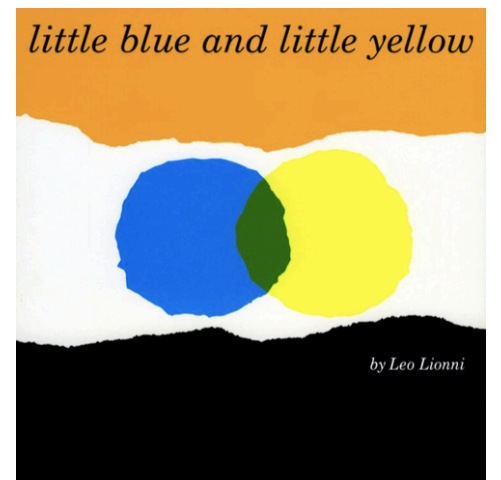
谷川俊太郎が絵本に関わる仕事をはじめたのは1965年からです。1969年に翻訳したレオ・レオニ (Leo Lionni: 1910-1999) 原作の『スイミー』は、小学校の国語の教科書に掲載されてきたため広く知られています。レオニの絵本は多く邦訳されていますが、『スイミー』と同年に翻訳された『フレデリック』をはじめ、そのほとんどは谷川による訳です。ここでは、レオニやその作品を手がかりに、谷川の絵本に対する関心の一端について考えてみましょう。

レオ・レオニはイタリア出身で、アメリカで活躍したイラストレーター、絵本作家です。叔父の影響でパウル・クレーやパブロ・ピカソの芸術に親しみながら育ちました。クレーとピカソは、非常に抽象的な絵画を描いた点で共通しています。クレーは、ドイツでバウハウスという芸術学校の教師をしていましたが、そこでは純粋な抽象絵画を最初にはじめたヴァシリー・カンディンスキーも同僚をしていました。バウハウスは近代絵画を抽象芸術として総合し、デザインという概念を示した最先端の芸術機関でもありました。レオニは、バウハウスの後継にあたるアメリカの芸術学校ブラック・マウンテン・カレッジで、1946年に教師をしています。

その後の1959年に、レオニは孫のために最初の絵本“Little Blue and Little Yellow”を手がけています。(この作品は児童文学作家の藤田圭雄が『あおくんときいろちゃん』として1967年に邦訳しています。)そこでは、抽象的な色や形がいきいきとした意思をもって、物語を展開していきます。このような傾向は、例えば『自分だけの色』(谷川俊太郎訳)といった作品にもみられます。ここでは、レオニが抽象造形、つまり純粋な色や形に関心をもって作品に反映させていたこと、そのようなレオニの仕事に対して谷川が惹かれていたことを確認しておきましょう。



『スイミー』



“Little Blue and Little Yellow”

□《ことば》にすることが難しい純粋な色や形の世界

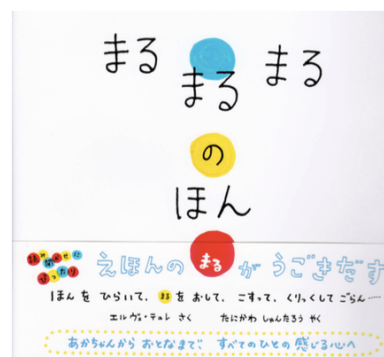
谷川俊太郎が抽象造形に心を寄せていることは、近年の絵本に関わる仕事で顕著にあらわれています。例えば、元永定正との合作『いろ いきてる!』(2008)や、エルヴェ・テュレの『まるまるまるのほん』(2010)、『いろいろな色のほん』(2014)の邦訳がそれにあたります。特にテュレの『まるまるまるのほん』は、レオニの『あおくんときいろちゃん』との強い類似性が指摘できます。そこでは、生の絵具が水を含んで混ざりあいながら多様に変化する姿や、鮮やかな色のまるが増えたり整列したり膨らんだり重なりあったりする様子、《ことば》で言い表すことが難しい、物理的な現象が生む視覚的な世界の在りようが目に飛び込んできます。



『いろ いきてる!』



『いろ いきてる!』の一部



『まるまるまるのほん』 『まるまるまるのほん』の一部



□谷川俊太郎がつむぐ《ことば》と世界における生の感覚

人類が言語を獲得したのは、一説によればおよそ4万年前です。その後、文字言語を発明してから世代間での情報蓄積が可能になり、文明が作られ社会は急速に発展してきました。一方で、物理的な現象世界へはたらきかけ、素材をとおして何かを作る営みは、少なくとも200万年は遡ることができます。私たちは、いろいろな現象がおりなす世界を、言語によって切り取って認識します。しかし、言語化できるのは、世界にある現象のほんの一握りです。言語は文化や国といった社会的な影響の下にあります。例えば「虹」という現象に対して、色を4つに分けて色名をあてはめる社会もあれば、7つに分けて色名をあてはめる社会もあります。生の現象がおりなす世界の認識と、言語による認識は、必ずしも対応しないことが分かります。

谷川が惹かれたレオニに影響を与えたクレーやピカソは、幼児期の子どもの美術から多くのインスピレーションを得ていた点でも共通します。幼児期の子どもは語彙数が少なく、視覚や触覚、聴覚などの感覚を通して、文化や言語に縛られない豊かな世界認識を作っています。このような前言語的な子どもの感性に対する関心が、《ことば》をつむぐことを生業とする谷川を上記のような絵本に関わる仕事へ動機付けているようにも思えます。そこでは、言語に縛られない生の世界に自分を開いたうえで、言語による認識とのギャップを埋めるように自らの《ことば》をつむいでいくという、ありのままの世界に対峙する谷川の姿勢があります。

『いろ いきてる!』の一場面(上図)での、谷川の《ことば》は次のようになります。

おわりそうなのはじまり　　はじまりそうなおわり

谷川がつむぎだす《ことば》は、色や形をとおした私たちの前言語的な世界認識を、《ことば》の側から豊かに広げてくれます。ここに、絵とことばが響きあう、谷川俊太郎が関わる絵本の魅力があります。その営みは、高度に文明化した社会で、便利さだけでなく生きづらさをも抱えている私たちに、世界を生きている私の“生”の感覚を回復させるきっかけを与えてくれるようです。



『クレーの絵本』

□ 石田徹也が描いた現代日本

飛行機に組み込まれた人間が、一見、不気味に描かれている。よくみると、この飛行機は太い鉄製の脚で固定されており、マスコットキャラのプリントがほどこされている。このことから、テーマパークなどにある遊具だということが分かる。また、外装の剥げた塗料や錆から、新しいものではなく、一時代前のもののようだ。

鳥などの空飛ぶモチーフは《自由》を象徴する。しかし、この固定された遊具の飛行機は、人工的に作られた自由の中で戯れることを強いられる《不自由》を暗示している。そして、そのような仕組みは、既に時代に適合していないシステムであることも示唆されている。だが、無表情に両手を広げながら複葉機の欠けた上段の羽を補っている人間は、システムに組み込まれながらもそれを変えられずに従属し、システムの存続に貢献する無力な存在として描かれている。

作者の石田徹也は、超現実主義（シュールレアリスム）という手法で、現代日本では当たり前とされているがゆえに見えにくい社会的現実を、刻銘に描いた芸術家である。

次の作品は、学校に組み込まれた人間である。子どもは、「将来的な《自由》を獲得するため」、「幸せになるため」という便宜的な目的のもとで、学校に適応するよう大人社会から求められる。しかし、子どもが学校を卒業して参加する大人社会はどのようなものであろうか。石田は、画一化された教育を受けた人間が、入れ替え可能な存在となって社会を生きる様を描く。朝の通勤ラッシュで、まるで貨物列車の荷物のように電車に押し詰められ、無表情で出社する会社員。会社の帰りには、ファーストフードなどのチェーン店で、あたかも車がガソリンスタンドで燃料補給するかのように食事する。我々は、画一化された行政や市場といったシステムの歯車の一部となっている。その結果、「私が、私でなくてもいい感覚」、「私の代わりは、他にいくらでもいる感覚」、つまり入れ替え可能な存在としての私という感覚が、我々の社会に蔓延している。石田が描くシステムに組み込まれた人間からは、群衆の中で孤独に生きざるをえない「生」と、我々を生かすそのシステムがいつまで続くのかということに対する「不安」を予期させる。



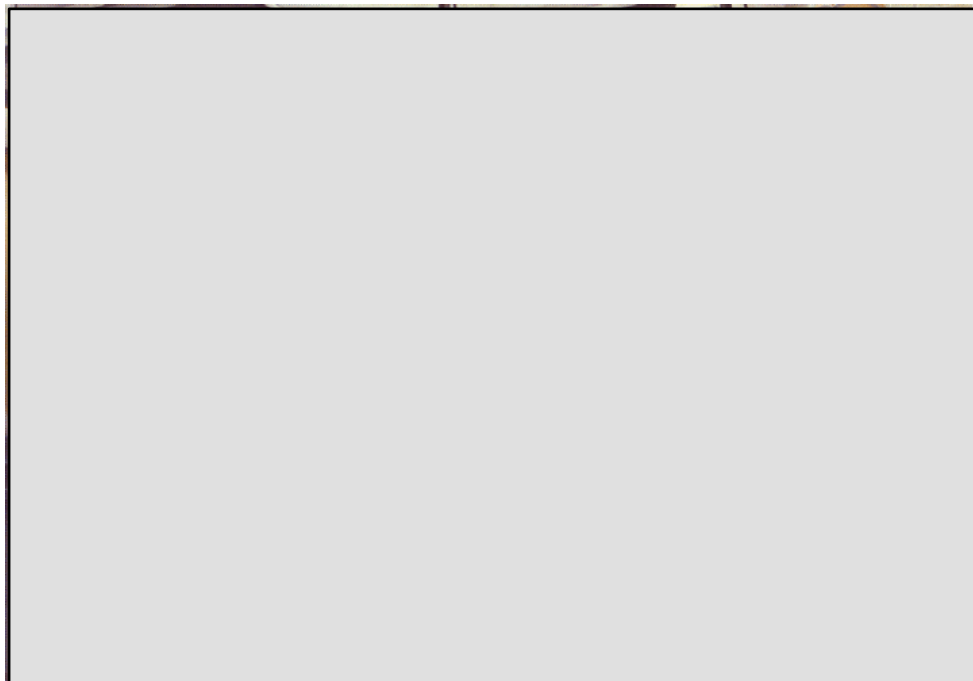
《飛べなくなった人》（1996年）



《囚人》（1999年）



《無題》（2001年）



《燃料補給のような食事》（1996年）

□ システムが全域化した社会を生きる我々

社会科学では、市民社会、国家行政、市場経済という三つの力点から社会を把握する思考枠組みがある。そこには、近代は市民社会の樹立からはじまり、その役割の一部を国家行政や市場経済といったシステムに外部化することで、安心、安全、便利、快適を獲得し、自由を拡大できるとしてきたフィクションがある。

例えば、前近代までの教育は家庭や地域の中で行われていたが、近代以降は一行政システムとしての学校が教育を集約的に担うようになった。このことで、家庭や地域での教育機能は多くが免除されるようになり、子どもから開放された大人は市場での労働活動に集中できるようになった。また、前近代までは生活に関わる労働と消費の多くは家庭や地域、ローカルな市場に埋め込まれていたが、近代以降はナショナルな、そしてグローバルな市場へ遊離していった。生活に関わる便益は市場から調達できるようになり、生活労働の多くは免除されるようになった。

このようなシステムは20世紀後半になると飽和し、社会への全域化が認識されはじめた。生活全般の役割がシステムに外部化され、市民社会を構成する家庭や地域での入れ替え不可能なコミュニケーションが空洞化していく。例えば、子どもへの無条件の承認が、学業成績という条件付きの承認へ。手料理が並ぶ食卓を家族が囲む食生活が、ファーストフードやコンビニ弁当による個食へ。総じてコミュニケーションは、入れ替え可能性が増大していく。かつては、人間が便益のためにシステムを使っていると認識できた。しかし現在は、システムがその存続のために人間を使っているという主客逆転の認識が方が、我々を取り巻く状況に適しているようになっている。

石田徹也が描く人々はシステムの中で孤独化されていると同時に、自身を孤独化するシステムの存続に貢献している。感情を媒介して結びついた入れ替え不可能な人間関係は空洞化し、変質した「生」が常態化し、「不安」に満ちた社会を無前提に生きている我々の異常性を、石田はこのように告発する。